

「よりエクセントリックでより闘争的な研究」⁶⁾を本書は凌駕している感じがしない、と述べている。この Edwards の論評については、確かに、以上見てきた本評からも明らかなように、Pouderon の著作が全体として目新しさを欠くことは否みがたい。しかし上述のように部分的には新しい視点・方向性も見られるのであり、かつ、こういう分野の研究の存在意義にまで立ち帰った言及が見られることは、人文科学が社会的に貶められている今の世の中ではむしろ評価すべきことだろう（今どき研究の存在意義を顧慮せずに学問的議論に沈潜できるのは、Oxford の教父学者のような一部の特権的存在に限られる）。他方、個別的内容に対する Edwards の批判に関しては、その後 Pouderon を編者の一人とする『キリスト教ギリシア語文学の歴史』の刊行が同じ叢書から始まっている⁷⁾。これまでのところ、方法論的内容の序説を成す第 1 巻（評者未見）だけしか出ていないので、Edwards が行なったような内容的な批判への応答はまだないのかもしれないが、しかるべき議論が行なわれるのを期待したい。

Kendeffy Gábor

Mire jó a rossz?: Lactantius teológiája

(ケンデフィ・ガーボル 『悪は何のために善か？

——ラクタンティウスの神学』)

Catena Monográfiák 9., Budapest: Kairosz Kiadó, 2006, pp. 312,

ISBN 963 662 004 0, ISSN 1587-2599, A/5, 3500 Ft.

秋 山 学

本書の著者ケンデフィ・ガーボル氏は 1962 年生まれ、現在ハンガリーの首都ブダペシュトに本拠を置くカーロリ・ガーシュバル・プロテスタント大学

6) R. M. GRANT, *Greek Apologists of the Second Century*, London: SCM, 1988.

7) E. NORELLI & B. POUDERON (eds.), *Histoire de la littérature grecque chrétienne*, vol. 1 (Initiations aux Pères de l'Eglise), Paris: Cerf, 2008.

(KGRE) の人文学部・自由学芸学科において講座主任 (tanszékvezető) を務め、教父学・ヘレニズム期哲学を専攻する気鋭の研究者である。彼の経歴を紹介すると、1981年から87年までブダペシュトのELTE (エトヴェシュ・ローラント大学) にて哲学とラテン学を、84年から91年まで古代ギリシア学を修めた後、90年から97年までELTEのラテン学講座にて助手を務め、97年には「聖アウグスティヌスとアカデミア派の懐疑主義」と題する論文で博士号を取得して講師職に就き、2004年にはKGREの神学部にて哲学講座教員となり、2008年から現職にある。本書はハビリタツィオ (教授資格請求論文) であり、本誌の前号に紹介したトート・ユディット女史の著書と同様、ペーチ大学のショモシユ、ヘイドル両氏が編集主幹を務める教父学研究叢書「カテナ・シリーズ」の一卷として上梓された (本誌第48号の拙稿・拙評を参照)。本書の著者ケンデフィ氏を含め、以上ここに名を挙げた方々は、毎年6月下旬に中部の都市ケチケメートにて開催される「ハンガリー教父学協会」(MPT; Magyar Patrisztikai Tarsaság) の中核メンバーとして活躍され、現在ハンガリーの教父学界・思想界をリードする立場にある。その中でケンデフィ氏は長らく事務局長 (titkár) を務め、評者も2006年から口頭発表を継続するなかで、大変お世話になった。

さて本書は、序文と付録を除き、全10章により構成されている。各章の章題、および章の下位区分である節の節題を以下に訳出する。第1章「ラクタンティウスの生涯と著作」、第1節「生涯」第2節「伝承された著作」第3節「散逸した著作」。第2章「古代思想における二元論的傾向」、第1節「異教の伝承における〈摂理〉の概念」第2節「ラクタンティウス以前のキリスト教およびユダヤ・キリスト教の伝承における〈摂理〉の概念」第3節「二つの霊，“二つの手”，“二つの道”」。第3章「神の本性」、第1節「神の属性」第2節「神の非物体性とその姿」第3節「ある比較：『偽クレメンス文書』における神の姿」第4節「火としての神」第5節「神の運動における物的・知的側面」。第4章「二つの霊」、第1節「二つの霊の誕生」第2節「悪魔の墮罪」第3節「悪霊の増殖をめぐる、宇宙論的目的」第4節「仲介者としての二つの霊」第5節「神の二つの手」。第5章「宇宙論的二元論」、第1節「質料」第2節「宇宙論的対項」第3節「神と世界」。第6章「人間論的二元論」、第1節「形作られた肉体、溢れ出た霊」第2節「闘いか、契約か」。第7章「諸々の苦難」、第1節「苦難の本性」第2節「苦難は克服すべきこと」。第8章「二つの道」、第1節「二つの道、二人の導き手」第

2節「悪魔と神の戦術」第3節「二つの道の働きの目的」第4節「道具と化した罪」第5節「地上および天上における善の排他性？」第6節「二つの道の教説に関するラクタンティウスの典拠」。第9章「諸々の徳」、第1節「神義論の下での叡智の倫理的概念」第2節「もっぱらキリスト教的な徳としての正義」第3節「本性的徳は、異教徒のうちにもなお存在しうるか？」。第10章「護教家としてのラクタンティウス」、第1節「目的の公衆」第2節「目的」第3節「存在の位相と修辞」。そして巻末に『神学綱要』(*Epitome Divinarum Institutionum*)のハンガリー語初訳が付録として付されている。

評者は、本誌前号に書評したトート女史の著書(本書と同じくハピリタツィオ)が、上掲のハンガリー教父学協会年次大会における発表の成果を軸に組み立てられていることを指摘したが、ケンデフィ氏による本書も、ほぼ同じ経過を辿って上梓に至ったことが推察される。ケンデフィ氏は第1回大会(2001)では「ラクタンティウスの二元論的システム」、第2回大会(2002)では「ラクタンティウスにおける“二つの道”の教説」と題して発表を行っており、これらはいずれも *Studia Patrum* (ブダペシュトの聖イシュトヴァーン書林発刊; 本誌第48号参照)のI(2002)およびII(2007)に収録されている。前者は1「神論」2「前宇宙論的二元論」3「宇宙論的二元論」4「人間論的・倫理的二元論」の4節より成るが、各節はいずれも拡充敷衍されて、本書の第3, 4, 5, 6あるいは9章のうちに展開されていることがわかる。また後者は本書第8章の骨子を成している。さらに著者ケンデフィ氏は、第3回大会(2003)で「ラクタンティウスとギリシア教父たち」、第4回大会(2004)では「ラクタンティウス『組織神学』における護教論的目的の公衆」(著者は一貫して *Divinae Institutiones* を『組織神学』と訳す)と題する発表を行っており、これらは第3回・第4回大会の内容を合本とした既刊の *Studia Patrum* III(2010)には取められていないものの、それぞれ、本書第2章の後半、および本書第10章の基となっている。さらに著者は第5回大会(2005)で『偽クレメンス文書』における創造者と像性」と題する発表を行っており、これは本書第3章第3節へと改筆されている。こうして、本書が刊行される2006年まで、著者は上掲の教父学協会年次大会をベース・メーカーとして活用してきたことがわかる。

本書は、上に章題を概観したことで理解されるように、ラクタンティウスにおける善と悪の二元論的傾向に関して、それを神論・宇宙論・人間論その他にわた

って徹底的に解明した画期的な研究である。従来ラクタンティウスと言えば、その流麗なラテン語の文体に注目が集まるのが慣例であり、「キリスト教徒のキケロ」ないし「ラテン・キリスト教ヒューマニズムの祖」といった評価が主となってきた。そして、著作の中に聖書への言及が少ないこと、元来修辞学教師であった経歴が影響して神学的鍛錬に欠けたことが推測されることなどから、神学者・思想家として扱うには値しない作家であると見なされることが多かったように思われる。それに対して本書の著者ケンデフィ氏は、本書の副題にもあるように、ラクタンティウスを「神学者」として取り上げ、その主著『組織神学』を中心に、ラクタンティウスの真の姿を解明するキー・テーマとして「善と悪」の二元論を据えている。本者の「序文」より、著者の言葉に聞くことにしよう。

「本書の主たる目的は、わたくしにとって、3・4世紀に生きたキリスト教思想家ラクタンティウスを読むことが意味した知的なスリルを、他の人々と分かち合うことにある。わたくしは検証の過程で、彼に固有の二元論的思考様式の論理を明らかにすることに努めた。その論理とは、悪が、神の摂理の計画にいかん適合するか、ということに回答を求めるものである。わたくしは、このアフリカの神学者の真のシステムを構築しているものが、2・3世紀のキリスト教およびユダヤ・キリスト教の伝統だけでなく、古代哲学の伝承にも依拠しつつ、後のあらゆる神学研究の領域を覆うものである、ということに思い至った。実際それは、神論にはじまり、宇宙論、人間論を経て、政治神学にまで及ぶ。このシステムは一貫したものではなく、その軌轢は、部分的には人間の本性そのものに根ざすものである」。そして、著者のこのような解釈をより明らかにするために、ラクタンティウスの主著『組織神学』の概要である『神学綱要』の訳文を巻末に付した、と述べられる。

このようなラクタンティウスにおける二元論に関しては、写本によっては当該箇所が削除されている場合もあり、本人の説であるかどうか議論されることもあった。本書では一貫して、この傾向がラクタンティウス自身の教説であるとされ、そこから議論がダイナミックに展開される。おそらくストア派に端緒を有すると思われるこのような善悪二元論を核に、神学・哲学・倫理学のおよそあらゆる分野に向けて、著者の分析と精緻な読みが展開される点こそ、本書の圧巻である。ラクタンティウスは、世界的にもまだ十分に評価されることの少ない教父であるが、東方教父で占められる「初期キリスト教父」から「ラテン教父」が独立

して誕生する時期に、その冒頭に位置する人物である。本書は、ラクタンティウスの意義を再提起するに相応しい力作であると言えるだろう。

Stephen M. Hildebrand
*The Trinitarian Theology of Basil of Caesarea:
A Synthesis of Greek Thought and Biblical Truth*
Washington, D. C.:
The Catholic University of America Press, 2007, pp. vi + 254

土 橋 茂 樹

本書は、現在ステューベンヴィル・フランシスカン大学神学部の准教授である著者が2002年にフォーダム大学から博士学位を取得した際の学位論文「カイレイアのバシレイオスの三一神学における用語上の功績と聖書解釈」をもとに、大幅な加筆修正を経て刊行されたものである。本書を一言で評するなら、カッパドキア三星の先陣として、ニカイア公会議以降の教義論争の荒波に立ち向かったバシレイオスの浩瀚な著作群に取り組み、彼の三一神学の全体像を丹念に纏め上げた労作と言い得るだろう。

振り返れば、バシレイオス没後1600年を記念した国際シンポジウム(1979年)の全容がP. J. Fedwick編集の2巻本として1981年に公刊されて以降、バシレイオス研究は新たな時代を迎えたと言ってよい。たとえば、バシレイオスの伝記として、R. T. Smith (1879), W. K. L. Clarke (1913) 以後の空白を埋めて余りあるP. Rousseau, *Basil of Caesarea* (1994), 三一神学史における従来のバシレイオス理解に修正を迫るH. -C. Brennecke, *Studien zur Geschichte der Homöer* (1988) やL. Ayres, *Nicaea and its Legacy* (2004), さらにバシレイオス三一神論研究における金字塔B. Sesboué, *Saint Basil et la Trinité* (1998) など、既に定評のある研究書に限っても枚挙にいとまがないほどである。こうしたリストの中に本書を置いてみるならば、確かに英語圏において待望久しいバシレイオス三一神